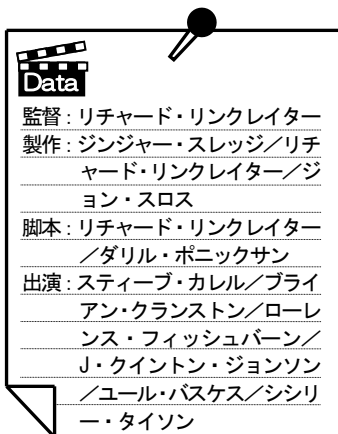




■■■ショートコメント■■■

◆松山市の愛光中学・高校を卒業した私は、2017年5月には大阪で開いた高校卒業50周年の記念同窓会に出席し、来年2019年5月には松山で開かれる70歳記念同窓会に出席する。それに対して『30年後の同窓会』と題された本作は1973年頃に20歳前後でベトナム戦争に従事していた3人の男、サル（ブライアン・クラストン）、ミューラー（ローレンス・フィッシュバーン）、ドク（スティーブ・カレル）が、30年後の2003年に（プライベートな）同窓会を開く物語。

◆冒頭、サルが営む小さなバーに、ドクが1人で訪れてカウンターに座り、ビールを注文。そして、「この店のビールはうまい！」と見え透いた言葉でサルに話しかけてくるから、こりゃちょっと変わったお客。サルがそう思っていると、「俺がわからないか？」と問いかけてきたから、よくよく見ると、何とこの男はベトナム戦争での戦友、ドクだったから、サルはビックリ。

◆ストーリーは続き、ドクがサルをある教会に連れて行くと、そこで説教していた大柄な牧師もベトナム戦争で一緒に戦った戦友のミューラー。破天荒だったあの男が、今は敬虔な信者を乗り越えて、牧師になっているとは・・・。

そこから、30年ぶりに再会した3人の50歳前後の男たちの同窓会（＝ロードムービー）が始まるが、それはドクから2日前に遠い地で戦死した息子を故郷に連れ帰る旅に同行してもらいたいと頼まれたためだ。小さなバーの経営者であるサルは時間だけはタップリあるが、牧師のミューラーは予定がいっぱい。しかし、尻に敷かれている妻の説得を受けて、ミューラーも2人の旅に同行することに。

ロードムービーにもいろいろなパターンがあるが、このようにして始まったベトナム戦争帰りの旧友3人の“30年後の同窓会”としてのロードムービーの行方は？

◆リチャード・リンクレイター監督の『6才のボクが、大人になるまで。』（14年）（『シネマ35』46頁）は、6才のボクが中学、高校を経て大学に入学するまでの12年間を、同じ俳優が集まり、毎年脚本を練って劇映画にしたものだったから、前代未聞の企画。また映画界で12年契約は超異例だ。

それと同じように、本作も同監督が12年間かけて実現した“50歳のスタンド・バイ・ミー”。したがって、3人の男たちが織りなすさまざまなエピソードは楽しくかつ人生訓にあふれているが、それ以上の映画としてのドラマ性は薄い。しかも、ちょうど50歳になった時に観れば『30年後の同窓会』はピッタリ自分の感覚にフィットするのかもしれないが、今や「50年後の同窓会」をやっている私には、本作にみる3人の男たち以上に人生を達観した気持ちも……。そんな私には、本作は“まあ、良い映画だったナア”というだけでおしまい……。

2018（平成30）年6月26日記